

旧庁舎跡地活用に見る市民ホールを有する地域拠点「核」の形成

—津市久居アルスプラザの整備過程を事例として—

Study on the formation of a regional base "nucleus" with a civic hall seen for the utilization of the former government building site.

-Case study of the improvement process at Hisai Ars Plaza, Tsu City.-

小野寺 一成*

Kazushige ONODERA

Keywords : Regional bases, Nucleus, Succession, Process, Public participation, Regional revitalization

地域拠点、核、継承、過程、市民参加、地域活性化

1. はじめに

1) 背景

我が国の人口は既に減少傾向にあり、超少子高齢化社会を迎えているなか、地方都市においては、持続可能な集約型都市構造への転換が求められている。特に2014（H26）年度に都市再生法が改正され、立地適正化計画^{注1）}の策定が定められたことから、全国の市町村で集約型都市構造への転換が模索されており、コンパクト・プラス・ネットワークの概念が謳われている。そのような中、持続可能な多核ネットワーク型都市構造^{注2）}の形成が目指され、その多核ネットワーク型都市構造を実現する「核」の重要性が問われるとともに、多核ネットワークの核となる「地域拠点」の質と内容が問われている。ここでいう「核」とは、物事を中心を意味し、地域におけるエリアの中心、かつ、市民の心の中心を意味するものとする。

2) 目的

本稿では、地方都市であり三重県の県庁所在地である津市において、総合計画や都市計画マスタープランに「副都市核」と位置付けられている、久居駅周辺地区に建設された「地域拠点」の形成過程を事例とする。

新たな文化の交流、創造の拠点整備であり、久居地域の活力ある発展を目指してつくられた久居アルスプラザ^{注3）}を題材として、歴史的な文脈を継承した地域拠点の形成過程を明らかにし、地域の活性化に資する地

域拠点「核」形成の在り方を示唆したい。

3) 研究方法

三重県の県庁所在地である津市の市町村合併と旧久居市の歴史を紹介しながら、1) 津市における旧久居市の位置づけ、津市における地域拠点の位置づけを明らかにする。次いで、2) 地域拠点の①整備場所の選定経緯と②整備計画及び③管理運営計画の内容を明らかにし、地域拠点「核」の形成過程を示す。最後に、3) それらの内容をもとに、地域の核となり地域の活性化に資する地域拠点形成の在り方を示唆することを試みる。

2. 津市及び旧久居市の歴史

1) 津市の誕生

津市は、古くは安濃津と呼ばれ、坊津（鹿児島県南さつま市）・花旭塔津（福岡県福岡市）と並んで「日本三津」の一つとされる。江戸時代に入ると、築城の名手である武将藤堂高虎が伊勢国・伊賀国の領主として入り、津城を中心とした城下町として発展するとともに、伊勢参宮の街道を城下に引き入れるなど、交通の要衝として街道を整備したことにより、宿場町としてもにぎわっていた。

1889（M22）年4月、全国30市とともに日本で初めて市制施行した都市となった津市は、明治時代・大正・昭和初期にかけて、産業の近代化が進み、市内に多くの紡績工場が進出し、全国有数の紡績業が盛んな

*三重短期大学 生活科学科 生活科学専攻 居住環境コース
博士（国際地域学）

Prof., Dept. of Life and Environmental Science at Tsu City College.
ph.D. (Regional Development)

地帯になった。さらに、戦後、高度経済成長期には、電気産業、造船産業などを中心に近代工業へ進展し、最先端技術を取り入れた企業の進出が進んでいた。

2006（H18）年1月1日に、旧津市、旧久居市、旧河芸町、旧芸濃町、旧美里村、旧安濃町、旧香良洲町、旧一志町、旧白山町、旧美杉村の10市町村が合併して新「津市」が誕生し、現在の津市に至っている^{参1)}。

合併後の現在の津市の目指している都市構造のイメージは以下のとおりであり、津駅・江戸橋駅周辺地区、津新町駅・大門・丸之内周辺地区を「都市核」、本稿の対象である地域拠点「核」が位置する久居駅周辺地区を「副都市核」として位置付けている（図1）。

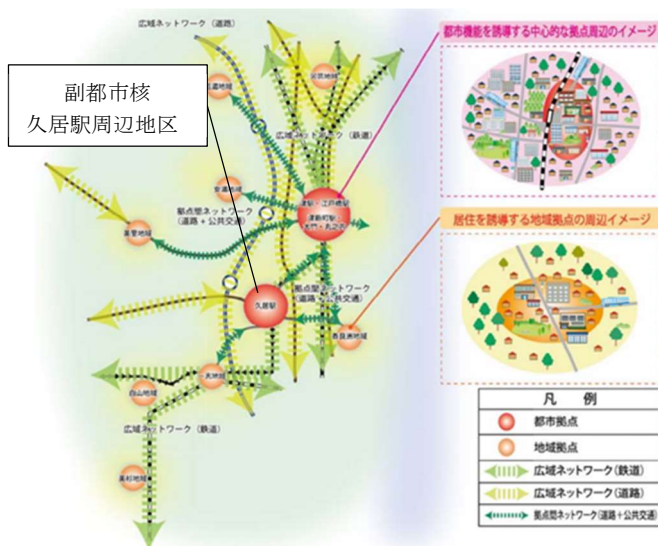


図1：津市都市構造のイメージ図【多核（拠点）＋ネットワーク（軸）】^{注4)}に筆者加筆

2) 旧久居市の歴史

1670（寛文10）年、初代藩主高通公は雲出の平原を一望に見渡せる野辺野の高台に陣屋と城下町を整備した。西南の高台を御殿の敷地とし、東に大手門、北に2カ所、西に1カ所の裏門をつくり、その中を町割りして藩士が住んだ。武家屋敷の街割は、中央に大手通りをつくり、南北には北から北町、中町、南町を設け、東西には西の御殿の方から上町、中町、下町と区分された。現在の、東鷹跡町と西鷹跡町である。

城外には寺町や、職人の町として万町、幸町、本町、二ノ町、旅籠町を設けた。町方の住民には宅地を無償にし、各戸に菜園を与えて保護したため、町は急速に発展した。寛文年間には侍屋敷が約200戸、町家は約500戸できたとされている。そして城下町が整備された翌年の1671（寛文11）年7月17日に高通公が久居藩初代藩主として入城し、ここに名実ともに久居藤堂藩が生まれた^{参2)}（図2）。

1871（M4）年の廃藩置県により、久居藩は久居県となり、その後、度会県となり1876（M9）年に合併し



図2：城下地割図（久居城下案内人の会「久居のお殿さま」より^{注5)}に筆者加筆

て現在の三重県になった。1879（M12）年に東鷹跡町に一志郡役所（後の久居市役所）が置かれ、一志郡の中心となった。1889（M22）年には市町村制が施行され、久居町、本村、戸木村、桃園村、七栗村、稲葉村、榊原村が誕生した。

当時三重県下に兵営がなかったことから、日露戦争後三重県議会で久居町に兵営を設置することが決まり、1908（M41）年に歩兵第51連隊約3,000人が久居の新兵舎に凱旋した。同年、県下で先駆けて津・久居間に軽便鉄道が開通し、次いで近畿日本鉄道の開通により交通機関が発達し、駅前には旅館や軍人関係の店が立ち並んでいた。その後、久居は太平洋戦争が終わる1945（S20）年までの37年間、三重県下にただ一つの軍都として賑わっていた。

戦後の交通の発達により、久居では津、松阪などのベッドタウン化が進んだ。全国的にも大都市周辺のベッドタウンでは人口3万人を超える町が急速に増え、久居町も1965（S40）年には人口3万人を超える町となった。1970（S45）年に「三万市制特例法」が成立し、同年8月に念願の「久居市」が誕生した^{参3)}。

3) 幻の久居城

初代藩主高通公は、軍学者植木升安に築城設計を命じた。当時、大名の築城は幕府にとっては重大な問題であり、厳しく制限されていた。植木が最初につけた設計図は軍事色が強かったため、幕府より設計変更を命じられた。その後、書き直した設計図が認められ、1670（寛文10）年10月に久居城の建設が始まった。

1980（S55）年に旧家臣箕浦家で「久居開闢（かいびやく）旧図」と上書きされた包紙の中から「久居外構要害図」が発見された。この図によると、町の周囲に大きな堀と、その内側に高さ二間の土塁が巡らせており、要所に櫓をもち、大手門の前に大きな丸馬出、内

部は直進を阻止する空間を作るなど、優れた設計となっている。また、大手には後の北海道五稜郭に見られる西洋風の三角塁があり、先進的な要素も取り入れられている。

この設計の久居城は幻となってしまったが、この図には修正箇所も書き込まれており、築城の交渉途上を読み取れる貴重な資料となっている^{参4)} (図3)。



図3：久居外構要害図（久居ふるさと文学館所蔵^{注6)}に筆者加筆

3. 整備場所選定の経緯

1) 地域拠点の場所選定

ここでは、地域拠点として整備される「(仮称) 津市久居ホール(現：久居アルスプラザ)^{注3)}」の整備場所選定の経緯を明らかにする。まず、久居地域に位置する老朽化した「久居市民会館」に代わる新しいホールの整備が検討された。当初は民間活力を導入した「久居駅東側周辺地区整備事業」の中で、事業プロポーザルにより取組を進めていたが、2012(H24)年5月10日に、当該事業プロポーズについて民間提案による整備を断念する旨が、市議会全員協議会で報告された。

その後、同2012(H24)年11月13日の市議会全員協議会にて、文化交流拠点となる市民ホールを久居駅東側に整備するプランAと、久居東鷹跡町エリアに整備するプランBの2案が提示された。2013(H25)年1月21日、久居市民会館は、老朽化による雨漏り等により、休館せざる得なくなり、同年2月7日、市民ホールを久居駅東鷹跡町エリアに整備するプランBの考え方を基本とすることが市議会全員協議会で説明された^{参5)}。

なお、前述プランBの計画地のある久居東鷹跡町は、旧久居市時代の行政の中心地区であったため、にぎわいのある地域で、建設計画地は、近鉄久居駅の西側約700mに位置している(図4)。

2) 地域拠点の内容検討

これらのことから2013(H25)年度には、計画地に



図4：計画地周辺の状況^{注7)}に筆者加筆

隣接する「久居ふるさと文芸館(図書館)」と連携した文化・交流活動拠点としてのホールに住民活動支援機能、行政機能の一部も併設する「(仮称) 津市久居ホール(現：久居アルスプラザ)」を整備する基本計画の策定に取り組むことになった。基本計画策定の取り組みとしては、有識者及び久居地域の文化活動者や自治会連合会などの地域の関係者から広く意見を聴くため、(仮称) 津市市民ホール整備基本計画検討委員会が設置された^{参5)}。

4. 基本計画等の内容

「(仮称) 津市久居ホール(現：久居アルスプラザ)」の整備基本計画の特徴的なことは、まず、(仮称) 津市市民ホール整備基本計画検討委員会、住民アンケート、パブリックコメントを経て作成されたが、施設の規模や機能などの詳細については、後日、(仮称) 津市久居ホール整備有識者委員会において検討され、市民及び文化関係者等へ説明後、有識者委員会からの意見書が提出されたことである。

1) 基本計画策定経緯

2013(H25)年度、久居駅周辺まちづくりの一環として、久居東鷹跡町に文化ホールを整備するため、有識者及び久居地域の文化活動者や自治会連合会などの地域の関係者により組織した(仮称) 津市久居ホール整備基本計画検討委員会を設置し、10回の委員会を開催して検討を重ねた。またその間には、久居地域を対象と住民アンケートを実施し、市民からの意見を収集し、整備基本計画を検討した。この検討内容を2014(H26)年2月24日、総務財政委員会協議会で説明後、パブリックコメントを実施し、様々な意見を取り入れた。これらを踏まえ、2014(H26)年4月、「(仮称) 津市市民ホール整備基本計画」を策定し、基本理念や基本的な考え方が示された。

しかしながら、施設の規模や機能など詳細については、(仮称)津市久居ホール整備有識者委員会を設置し、整備基本計画に基づいた検討を行うこととされた。2014 (H26) 年 8 月、劇場関係及び文化行政関係の有識者 4 名による有識者委員会を設置し、2015 (H27) 年 3 月までの間に計 7 回の委員会が開催された。この検討内容を 2015 (H27) 年 3 月中旬に久居地域の市民及び文化関係者等へ説明し、同月 24 日、有識者委員会からの検討結果として、市長に意見書が提出された^{参 6)}。

2) 基本計画の内容

整備基本計画の内容は以下のとおりである。基本理念は、「1.実演芸術を振興する」「2.独自性ある文化芸術の創造と発信を行う」「3.地域再生の活性化に寄与する」「4.学びと交流を促進する」であり、施設のテーマは、「地域をつなぐ開かれた独自性ある文化芸術の創造拠点」としている。

理念で掲げている「1.実演芸術の振興」を図る上で、相互に関連する「2.独自性ある文化芸術の創造と発信」を主に推進できる機能として、ホール機能、文化創造活動機能、情報発信機能を充実させ、「3.地域再生と活性化」を主に実現できる機能として、展示機能、市民文化芸術活動支援機能、市民団体活動支援機能、行政・窓口機能、交流・広場機能を充実させて、これらすべての機能により、「4.学びと交流」が推進できる機能を整備する。なお、各室空間の有効利用を図るため、多くの機能の兼用を考慮し、施設の規模が大きくなり過ぎないようにし、多くの利用が促進できるよう駐車場を整備することとしている。

また、事業のあり方として、基本理念である「1.実演芸術の振興」を図る上で、相互に関連する「2.独自性ある文化芸術の創造と発信」を主に推進する事業として、創造事業、鑑賞事業、国内・国際交流事業、情報発信事業を実施し、「3.地域再生と活性化」を主として推進する事業として、普及育成事業、協働事業、貸館事業を実施して、これらの事業により、「4.学びと交流」を推進するとしている^{参 6)}。

3) 有識者委員会意見書

(仮称)津市久居ホール整備有識者委員会における検討の主旨としては、今後設計段階へと向かうにあたり不可欠な基本計画における未消化部分への対応であったとされる。とりわけ中心的な課題とされたのは、施設の核となる主ホールの性格設定である。基本計画においては、その座席数は 300~1,000 席とされ、モデルプランには 3 案 (300 席、600 席、900~1000 席程度) が併記されており、規模をはじめとする最低限の性格付けがなされていない状態であった。したがって、当委員会においては、当該ホールを筆頭に、整理、明確化が必要となる室、スペースについて可能な範囲で順次検討を行っている。その際、施設全体の規模については基本計画に示された延床面積を遵守しながら、1.主ホール、2.スタジオ、3.専用展示ギャラリー、4.事務室、5.その他の室、スペース (①バンド練習室(音楽練習室)、②カフェ、③情報ラウンジなど) を詳細に検討している。

補記として、求められるあらゆる機能を同施設に集約するのではなく、練習場、工房、倉庫等個別機能に対応する空き家等を利用したサテライト施設を設置することの可能性についても一部検討されることが付記されている。加えて、劇場法に基づくことを謳う施設としては「何より管理運営面が肝要であることは論を俟たない」とされている。「劇場法の理念に則り、基本計画に示される理念、考え方を具現化するためには、従前の貸し館主体の施設とは次元を異にする人材・組織・資金が必要である」ことが強調され、運営にかかわる委員会を早急に立ち上げることが望まれる^{参 7)}と結ばれている。

4) 当初の予定スケジュール

「(仮称)津市久居ホール(現:久居アルスプラザ)」の当初予定スケジュールは以下のとおりである(表 1)。2016 (H28) 年度から実施設計に入り、2019 (H31) 年 6 月の開館予定であったが、駐車場用地確保の遅れなどにより、1 年遅れの 2020 (R2) 年 6 月開館となった。注目すべきは、上記有識者委員会意見書を反映し

表 1: (仮称)津市久居ホール(現:久居アルスプラザ)の当初予定スケジュール^{注 8)}

項目	H28年度												H29年度												H30年度												H31年度												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
解体工事																																																	
設計、建設工事																																																	
シンポジウム																																																	
条例案の作成																																																	
指定管理者指定に係る支援																																																	
パブリックコメント資料の作成及び支援																																																	

て、予定スケジュール表に「指定管理者指定に係る支援業務」が予め組み込まれていることである。

しかしながら、2020（R2）年1月頃から蔓延した新型コロナウイルスの影響により、グランドオープンは同年10月1日に延期された。

5.（仮称）津市久居ホールの整備計画

1）公開型プロポーザルの実施

津市では、（仮称）津市久居ホール設計業務委託の最優先候補者選定にあたり、公募型プロポーザル方式を採用した。（仮称）津市久居ホール設計業務及び管理運営計画策定業務プロポーザル方式審査委員会（以下、審査委員会）という、設計業務と管理運営計画業務の両プロポーザルを統括する委員会を設置しているのが特徴である。

（仮称）津市久居ホール設計業務委託公募型プロポーザル実施要領に従い、技術提案書類の提出を求めた後、（仮称）津市久居ホール設計業務委託公募型プロポーザル評価項目、判断基準及び配点に基づいて、第1次審査及び第2次審査の2段階審査が行われた^{参8)}。

2）選定の経緯

検討委員会は、実施要領等を検討した第1回審査委員会（2015（H27）年9月19日）、第2回審査委員会（同年10月11日）後、第1次審査を第3回審査委員会（同年11月26日）、第2次審査を第4回審査委員会（同年12月13日）で行われた。

第3回審査委員会において、事務局における企業要件等による「絶対評価」審査を経た8者の技術提案書に対する審議が行われ、この「絶対評価」得点と全委員による「技術力評価」得点の合算における上位5者を確認して、第1次審査通過者（第2次審査対象者）とされた。

第4回審査委員会では、第2次審査対象者5者による公開プレゼンテーション及びヒアリング（25分間のプレゼンテーションと25分間の質疑応答）を実施し各提案に関する審議を経て、全員における評価得点と事務局による「費用要件」得点との合算を行い、当該合算値の最上位である受付番号9番を最優先候補者、次点である受付番号4番を次点者としている^{参8)}。

3）審査の概要

（仮称）津市久居ホールのプロジェクトについては、独自のものと、より一般的なものの課題があり、それは技術提案書における特定テーマに組み込まれていた。前者については、「劇場法（『劇場、音楽堂等の活性化に関する法律』）に基づく施設」の実現という、当初より掲げられているスローガンに対応することである。一方、後者のより一般的な課題とはコストに関するも

のであった。

二つの大きな課題がそれぞれ組み込まれた特定テーマは（1）基本計画における「基本理念」「基本的な考え方」、そしてその基盤となっている劇場法の理念を具現化するための方策と、（4）ライフサイクルコストの低減及び工事発注の不調、不落を未然に防ぐための方策であり、それに敷地及び施設そのものに関する特定テーマは（2）敷地全体及び建物におけるゾーニング及び動線の考え方と、（3）個別の室・スペース及び複数室・スペース間の関係に関する考え方である。そしてそれらを総括するような「業務内容に対する技術提案（業務の取り組み方針及び体制）」を加えた書類提出を第1次審査時に、第2次審査ではそれに公開で行われたプレゼンテーション及びヒアリングの内容を加えて審査が行われた。

そのような中、最優先候補者の講評は以下のとおりであった。「基本計画とその基盤となる劇場法の分析を行い、それを方策に結び付けている提案としてまず高く評価された。基本計画等を踏まえながら提案をする姿勢は全般的にうかがえる。基本計画策定時から焦点の一つであった展示スペースについて、その1,000㎡確保時においてもホールが単独で利用できるよう想定し、それを示している点も秀でていた。ホールのみならずスタジオ、専用展示ギャラリーへの搬入を考え、搬入口を西側にとっている唯一の提案でもあった。ただしこれについては、西側駐車場からの1階レベルでの施設内アクセスを無くしているとのネガティブな評価も出された。総評においても示した通り、他にも全体の空間構成、オープンスペースに配された諸室に関してトレードオフの問題により、ポジティブ・ネガティブ双方の指摘がなされている。レベル差をつけた2階部分についての、変化に富んだ空間を生み出している反面、バリアフリーの面で好ましくないとの評価はその代表的なものである。なお、コスト抑制に関しては、大枠として効く延床面積を第2次審査参加者で2番目に小さい6,300㎡に設定することをはじめ、多様な方策が示されていた。全般として、「一般の市民目線での提案」「若い子が集まりそうな雰囲気を出している」との提案内容に関する印象（図5）と併せて、ヒアリングを経て、「押えるところは押えて、まだこれから変えようとするところは変えられますよという柔軟性のある姿勢」が高評価された。」^{参9)}とされている。



図5：最優先候補者の整備計画イメージ図^{注9)}

特に、一般の市民目線での提案、若い子が集まりそうな雰囲気、変えようとするところは変えられる柔軟性のある提案が評価された。また、提案された計画から、開放的な空間デザイン(図7、参考図1・2)が、地域の活性化に資する内容となっていることが伺える。ちなみに、特定テーマに関するコメント(キャッチコピー)は以下のとおりであった。

特定テーマ(1):市民の日常の文化活動を最重要視した、地元密着の「育成型文化施設」をつくり、久居地区の文化レベルを底上げします。特定テーマ(2):日常の文化活動を表出させて街の賑わいを創出するとともに、誰もがいつでも気軽に立ち寄れ、活気で溢れる施設をつくります。特定テーマ(3)「適正な諸室の仕様・構成」と「諸室の様々な組み合わせが可能な計画」により多様なニーズに応え、文化芸術の創造を推進します(図6)。特定テーマ(4):構造形式から維持管理にいたるまで、様々な計画メニューを徹底して精査し、ローコストでハイスペックの文化施設を実現します¹⁰⁾。となっている。

6. (仮称)津市久居ホール管理運営計画

1) 公開型プロポーザルの実施

津市では、(仮称)津市久居ホール管理運営計画策定等支援業務委託の候補者選定にあたっては、公募型プロポーザル方式を採用している。既設の(仮称)津市久居ホール設計業務及び管理運営計画策定業務プロポーザル方式審査委員会(以下、審査委員会)において、(仮称)津市久居ホール管理運営計画策定等支援業務委託設公募型プロポーザル実施要領に従い、企画提案書の(仮称)津市久居ホール管理運営計画策定等支援業務委託設公募型プロポーザル評価項目、判断基準及び配点に基づいて審査が行われた¹¹⁾。

2) 選定の経緯

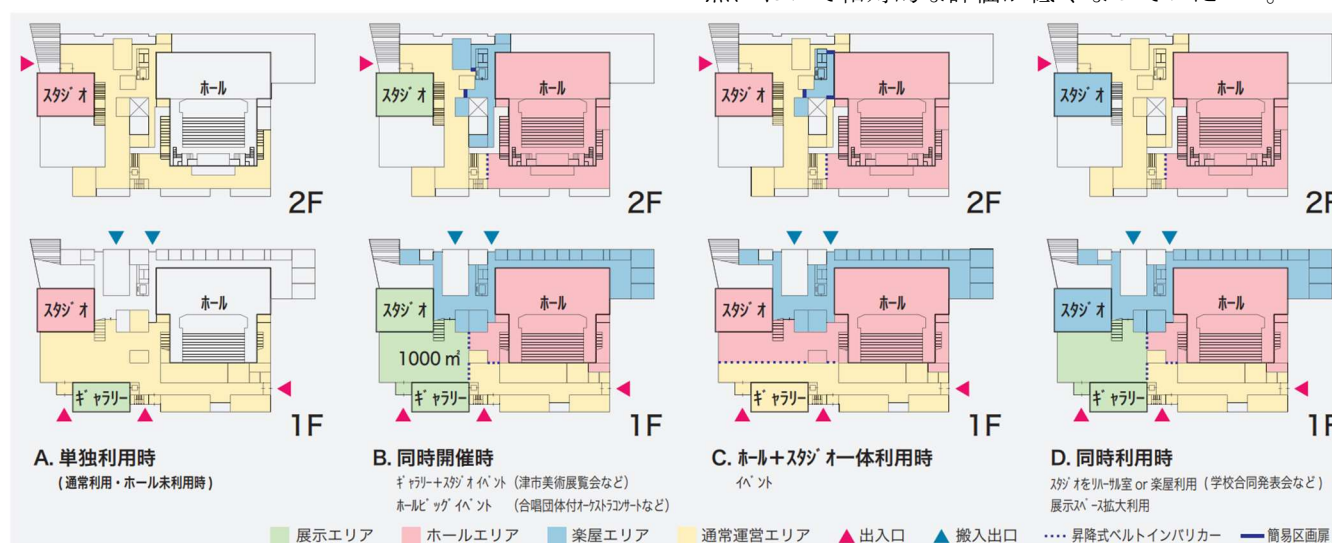
実施要領等を検討した第5回審査委員会(2016(H28)年7月9日)、審査を第6回審査委員会(同年8月20日)で行われた。

第6回審査委員会において、審査対象者3者によるプレゼンテーション及びヒアリング(15分間のプレゼンテーションと25分間程度の質疑応答)を実施し各提案に関する審議を経て、全員による評価得点と事務局による企業要件等の「絶対評価」及び「費用要件」得点との合算を行い、当該合算値の最上位であるC社を最優先候補者、次点であるK社を次点者としている¹¹⁾。

3) 審査の概要

(仮称)津市久居ホール管理運営計画策定等支援業務委託内容の「管理運営計画案の作成」と「その他関連する業務(その他、基本計画及びその基盤となっている劇場法の理念を具体化するために必要と考えられる業務)」の両項目に関係する部分で各者に差異がみられた。前者は本委託業務の中核であり、一方後者は、必要と思われる事項について加えることを認めるもので、そこで「市民参加に関する追加の程度に明確な差」が生じていた。

最優秀者は、その両項目において高い評価を得、「管理運営計画の作成」に関する部分に関しては安定感のあるある内容、そして「その他関連する業務」に関する部分については、「積極的な市民参加」が謳われており、その積極性は提案全体にみられるものとして、劇場法に基づく施設として独自性が模索されている(仮称)津市久居ホールにおいて相応しいと評価された。次点者の提案は、「管理運営計画案の作成」に関係する部分において高い評価を得たが、「その他関連する業務」に関係する部分については積極的な付加は無く、その点において相対的な評価が低くなっていた¹¹⁾。



特に、「その他に関連する業務」について、劇場法に基づく独自性が模索されていた（仮称）津市久居ホールにおいて、「積極的な市民参加」が謳われている姿勢が高く評価されている。これらの積極的な市民参加が、あるいは市民を巻き込んだ管理運営が、人を育て地域と一体となって活動することなど、地域の活性化に資する内容となっていたことが伺える。

7. 新旧市民ホールを有す施設の利用状況

ここでは、旧庁舎跡地に継承された新旧市民ホールを有する施設の利用者状況を比較する。久居市民会館（2013.1.21 休館）、及び久居アルスプラザ（2020.6.6 プレオープン）の利用状況は、表2のとおりである。

久居市民会館の大ホール利用者数は、2008（H20）年度までは年間2万人を超えていた。その後の老朽化に伴ってか2009（H21）年度に2万人を割り、1.5万人程度の利用者数まで減少し2012（H24）年度末に休館している。その8年後、久居アルスプラザが、2020（R2）年6月にプレオープンし、ホールの利用者数は10月のグランドオープン後半年間で概ね1.5万人の利用者となっている。全施設の来館者数は、およそ10ヵ月間で12万人を超えている。

なお、久居アルスプラザの全施設来館者数は、ホールとしての機能を有する「ときの風ホール」の他、アートスペースやギャラリー、カルチャールーム、エントランスロビーのアートスクエアなどの諸施設も含まれている（参考図1、2）。

表2：年間の利用者状況^{注11)}

	久 居 市 民 会 館						久居アルスプラザ	
	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2020年度	2021年度
ホール利用者数	24,886	22,740	19,526	19,243	15,963	13,718	6,609	10,131
全施設来館者数	-	-	-	-	-	-	15,329人	26,769人
							123,927人	97,158人

※上段はホール利用者数(久居市民会館2013.1.21休館)、下段は全施設来館者数

ちなみに、新型コロナウイルスの影響によりグランドオープンが2020（R2）年6月2日から10月1日に延期されたものの、津市久居アルスプラザ来館者は、2020（R2）年6月6日のプレオープンから2021（R3）年2月17日時点で10万人を達成している。この10



図7：久居アルスプラザ内部写真^{注12)}

万人という数字は、津市内の他の市民ホールの過去の入場者数より破格的に多い。津市中心部に位置する津リージョンプラザお城ホールでさえ、年間の入場者数は5万人程度である^{※12)}。

8. まとめと結論

1) まとめ

①場所の選定の経緯

津市の副都市核にあたる久居地域に、老朽化した「久居市民会館」に代わる新しい市民ホールの整備が検討され、当初は民間活力を導入した久居駅東側周辺地区整備事業の中で駅東側の新市街地に検討されていたが、結果として、文化交流拠点となる市民ホールを久居ふるさと文芸館（図書館）に隣接する旧久居城下の旧久居市庁舎跡を中心とした久居東鷹跡町エリアに整備されることとなった。

②基本計画等の経緯と内容

久居ふるさと文芸館（図書館）と連携した文化・交流活動拠点としてのホールに住民活動支援機能、行政機能の一部も併設する「（仮称）津市久居ホール（現：久居アルスプラザ）」を整備することになった。

久居駅周辺まちづくりの一環として、（仮称）津市久居ホール整備基本計画検討委員会を設置し、10回の委員会を開催し、久居地域を対象と住民アンケート調査、パブリックコメント後、基本理念や基本的な考え方が示され、施設の規模や機能など詳細については、（仮称）津市久居ホール整備有識者委員会を設置し、計7回の委員会が開催された。

基本理念は、「実演芸術を振興する」「独自性ある文化芸術の創造と発信を行う」「地域再生の活性化に寄与する」「学びと交流を促進する」であり、施設のテーマは、「地域をつなぐ開かれた独自性ある文化芸術の創造拠点」とされた。加えて、劇場法に基づくことを謳う施設としては「何より管理運営面が肝要であることは論を俟たない」とされている。

③整備計画の内容

津市では、公募型プロポーザル方式を採用し、（仮称）津市久居ホール設計業務及び管理運営計画策定業務プロポーザル方式審査委員会という、設計業務と管理運営計画業務の両プロポーザルを統括する委員会を設置しているのが特徴である。

設計業務プロポーザルでは、特に一般の市民目線での提案、若い子が集まりそうな雰囲気、変えようとするところは変えられる柔軟性のある提案が評価され、また、提案された計画から、地域に開かれた空間的なデザインが地域の活性化に資する内容となっていることが伺える。

④管理運営計画の内容

管理運営計画策定業務プロポーザルでは、特に「そ

の他に関連する業務」について、劇場法に基づく独自性が模索されていた(仮称)津市久居ホールにおいて、「積極的な市民参加」が謳われている姿勢が評価し、これらの積極的な市民参加と市民を巻き込んだ管理運営計画が、人を育て地域と一体となって活動することなど、地域の活性化に資する内容となっていたことが伺える。

⑤利用状況

利用状況は、新型コロナウイルスの影響により、グランドオープンが2020(R2)年6月2日から10月1日に延期されたものの、2021(R3)年2月17日現在、来館者数10万人を達成した。この10万人は、津市内の他の市民ホールの過去の入場者数より破格的に多い。

市民ホール時の利用だけでなく、日常的な利用を促進する空間設計と市民参加による企画運営の結果であると推測できる。

2) 結論

津市の副都市核に整備された地域拠点「久居アルスプラザ」は、新型コロナウイルスの影響化、2020(R2)年10月1日オープン後、2021(R3)年2月17日には10万人の来場者を有する施設となった。持続可能な多核ネットワーク型都市構造を実現する「地域拠点」の重要性が問われている中、その整備のあり方に重要な示唆が占められている。

まず、第一に、旧久居城下であり地域の中心地であった旧庁舎跡地を活用して整備したところである。久居駅東側周辺地区整備事業のなかで、現在の場所とは異なる久居駅東側の新市街地に整備される計画があったものを、元の現在地である「旧久居城下内の旧庁舎跡地」に戻したことが大きいといえる。

第二に、基本計画策定にあたり、(仮称)津市市民ホール整備基本計画検討委員会、住民アンケート、パブリックコメントを経て作成されたが、主ホールの性格設定のほか、施設の規模や機能などの詳細については、(仮称)津市久居ホール整備有識者委員会において詳細に検討され、「何より管理運営面が肝要であることは論を俟たない」としたことである。

第三に、整備にあたっては、設計から管理までの公募型プロポーザル方式を採用したこと。(仮称)津市久居ホール設計業務及び管理運営計画策定業務プロポーザル方式審査委員会という、設計業務と管理運営計画業務の両プロポーザルを統括する委員会を設置し、設計から管理運営までを一体的に捉えていたところである。

第四に、地域に開いた空間設計(ハード)を選出したこと、機能別の小空間(箱)が大空間(覆い)の中に点在していること、ステージと外階段、4つのエントランス、ひさいアートストリートとアートスクエアなどの半外空間が多く、地域に空間的に開いた設計となっており、ホール使用時だけでなく日常的に使われ

る空間設計となっている(図7、参考図1、2)。

第五に、市民と一体的な管理運営(ソフト)を実現しているところ、イベント、舞台公演企画、アルス放送局、ときの風ホールの教室利用、ギャラリー、カルチャールーム等の市民活用など、日常における積極的な市民参加を取り入れていることである。

結果として、旧久居市民の「心の中心」と「場所の中心」とが一致している、旧久居城下内の旧庁舎跡地という、久居地域の元からの地域の中心に地域拠点が整備され、多核ネットワーク構造の地域拠点「核」が形成されたことが大きい。現在の新型コロナウイルス禍でも、旧久居市民会館はもとより津市内の市民ホールのどこよりも利用者が多く、日常的に学生や市民が利用していることから、旧久居市民を中心に愛されているといえるのではないかな。

このように地域拠点の整備において重要なことは、多核ネットワークの「核」となり得ること、つまり、物事を中心であり、地域におけるエリア的(空間的)中心、かつ、市民の心の中心(誇り)となることが大切である。また、そうした地域拠点「核」の本質を捉えた整備のあり方と形成のプロセスが必要であり重要となる。

【謝辞】

本稿の資料及びデータは、津市ホームページ及び津市スポーツ文化振興部文化振興課より頂いている、ここに記して感謝したい。また、本稿は、三重短期大学 地域問題研究所の研 究員として研究助成(2019~2020)を受けている。

【補注】

注(1)国土交通省HP:立地適正化計画の概要及び意義と役割参照。

注(2)一般的に多極ネットワークと表記されていることが多いが、本項では「持続可能な多核ネットワーク型都市構造」と表記する。核とは、細胞核の核であり、物事を中心を意味する。

注(3)本文の整備計画及び管理運営計画中の表記は「(仮称)津市久居ホール」であるが、整備後、施設名称の公募により「久居アルスプラザ」となった。

注(4)津市都市計画マスタープラン(平成30年3月)より転写。

注(5)津市公式HP:「久居」のまちづくりより転写。

注(6)津市公式HP:幻となった久居城より転写。

注(7)津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料:(仮称)津市久居ホール整備基本計画(平成26年4月)より転写。

注(8)津市HP掲載資料:(仮称)津市久居ホール予定スケジュールより転写。

注(9)津市公式HP:(仮称)津市久居ホールプロポーザル最優先候補者資料整備計画イメージ図より転写。

注(10)津市公式HP:(仮称)津市久居ホールプロポーザル最優先候補者資料「様々な利用形態に対応できるエリアゾーニング計画」より転写。

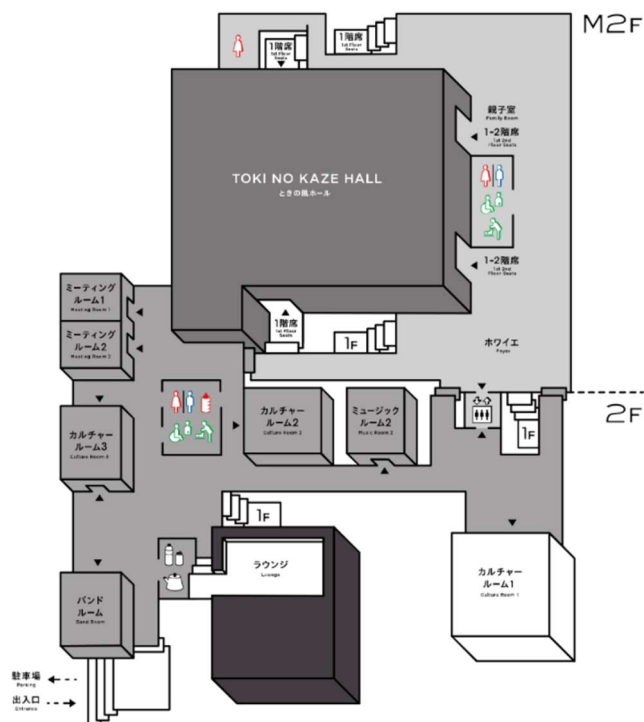
注(11)津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料(久居市民会館は大ホールの利用者数のみ把握)。

注(12) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供写真。
 注(13) 津市アルスプラザ公式 HP：フロアマップより転写。

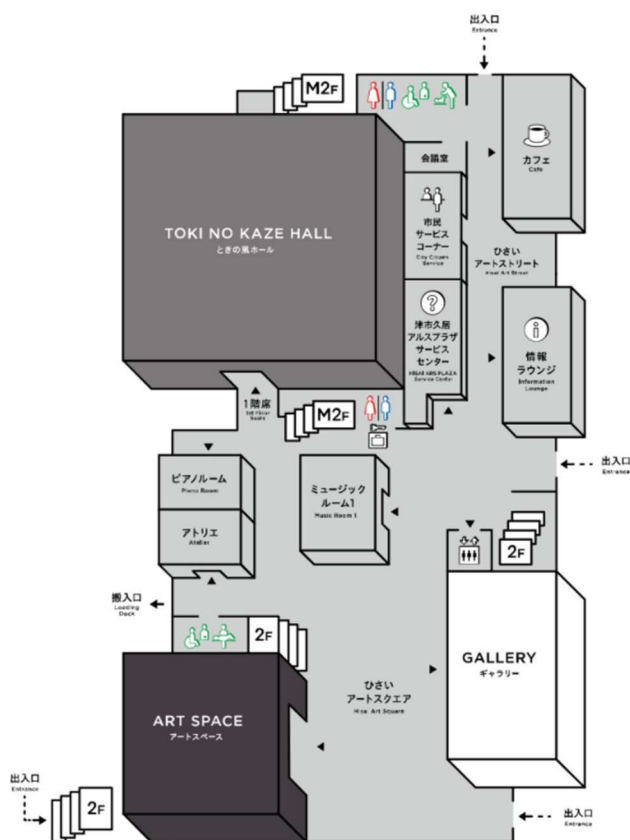
【参考文献】

- 1) 津市 HP 掲載資料：市の概要 津市のあゆみより。
- 2) 津市 HP 掲載資料：「久居」のまちづくりより。
- 3) 津市 HP 掲載資料：明治以降の「久居」より。
- 4) 津市 HP 掲載資料：幻となった久居城より。
- 5) 津市 HP 掲載資料：(仮称) 津市久居ホール整備に係る経過と今後の対応についてより。
- 6) 津市 HP 掲載資料：(仮称) 津市久居ホール整備についてより。
- 7) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料：(仮称) 津市久居ホール整備に関する意見書（平成 27 年 3 月 24 日）より。
- 8) 津市 HP 掲載資料：(仮称) 津市久居ホール設計業務委託公募型プロポーザルの審査結果についてより。
- 9) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料：(仮称) 津市久居ホール設計業務委託公募型プロポーザル審査講評（平成 27 年 12 月 28 日）。
- 10) 津市 HP 掲載資料：(仮称) 津市久居ホールプロポーザル最優先候補者資料より。
- 11) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料：(仮称) 津市久居ホール管理運営計画策定等支援業務委託公募型プロポーザルの審査結果についてより。
- 12) (仮称) 津市久居ホール整備基本計画（平成 26 年 4 月）P.19 表：市内ホール利用率・利用内容・入場者数（平成 24 年度実績）より
- 13) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料：(仮称) 津

市久居ホール整備基本計画（平成 26 年 4 月）。
 14) 津市スポーツ文化振興部文化振興課提供資料：(仮称) 津市久居ホール管理運営計画（平成 30 年 7 月）。



参考図 2：久居アルスプラザフロアマップ 2 F・MF 注 13)



参考図 1：久居アルスプラザフロアマップ 1 F 注 13)